

大学男子バレーボールにおける 1st テンポ攻撃に関する考察

ー レセプション・アタック局面に着目して ー

Consideration of 1st Tempo Attack in University Men's Volleyball

- Focus on the reception・attack phase

コーチング科学研究領域

5018A004-9 伊東 克明

研究指導教員：松井 泰二 准教授

【緒言】

バレーボールにおけるレセプションとは相手のサーブを受ける動作のことを表す。相手からの最初の攻撃であるサーブをセッターに正確に返球できれば、得意なバリエーションで攻撃ができ、得点につながるやすい(勝本, 2017)。吉田 (2006) は、レセプション・アタックの決定率について、「相手チームとの競り合いのゲームを展開するために重要な指標となり、高ければ高いほど有利なゲーム展開ができる可能性が高くなる」と指摘しており、メイフォース, G. (2006) はアメリカの大学トップレベルで勝利するための統計的指標としてレセプションからの攻撃局面において 66%以上のサイドアウト率が必要と報告している。また、レセプション・アタックは、サイドアウト率に最も大きく関与しており、バレーボールにおける攻撃局面の中でもっとも重要である(メイフォース, G, 2006)。バレーボールのゲームに勝利するためには、レセプション・アタックの得点率を高くすることが重要であると考えられる。

【目的】

トスが上がってから反応するリードブロックシステムが主流となっている現代のバレーボールでは、相手ブロッカーをクイック攻撃に引きつけ、サイド攻撃に対して移動を遅れさせることによって相手ブロッカーを不完全な状態にすることが必要と考えた。

本研究は、レセプション・アタック局面におけるクイック攻撃が勝敗やサイド攻撃に与える影響を明らかにすること、さらにレセプション・アタック局面においてクイック攻撃を成功させる要因の抽出を目的とした。

【対象】

関東大学男子バレーボール1部リーグに所属の12チームにおいて、2018年9月から10月に開催された平成30年度秋季関東大学男子1部バレーボールリーグ戦全66試合252セットを対象とした。各チームのレセプション・アタック局面において、セッターが1st テンポ攻撃の使用が可能となるAパス時およびBパス時を対象とした。また、本対象において勝ち数が最も多く、レセプション・アタック局面における1st テンポ攻撃の試技数が高かった1チームにおいては、1st テンポ攻撃の決定要因分析の対象チームとした。

【方法】

対象とした試合は、試合会場にてビデオカメラ DMC-FZ300 (Panasonic 社製) を用いて、コート後方の観客席上後方より撮影され、バレーボール専用の分析ソフトである「Data Volley」および「Data Video」(イタリア, データプロジェクト社製) を用いて必要なデータの入力を行った。Data Volley における標準的に設定されたコードに準拠し、Data Volley 上で加工したワークシートを Excel に出力した。また、うち1チームのレセプション・アタック局面における1st テンポ攻撃が行われた状況を Data Video の映像を用いて目視にて抽出し、コード化した。

【結果と考察】

1st テンポ攻撃の各項目と勝敗および得失セット、セット率の関係については、被ブロック率 ($r = -.696$)、効果率 ($r = .577$) に中程度の相関関係が認められた。被ブロックについては直接、失点につながるため失点

が増えることによる勝敗や得失セットへの影響であると推察される。決定率を高めることは当然のことながら、失点を減らし、特に被ブロック数を減らすことが得失セットへの影響を高める要因であると考えられる。

2nd テンポ攻撃の各項目と勝敗および得失セット、セット率の関係については、ミス率 ($r = -.728$) に高い相関関係が認められ、効果率 ($r = -.624$) に中程度の相関関係が認められた。1st テンポ攻撃と比較して、テンポが遅い2nd テンポ攻撃は、ブロッカーの参加人数が増え、アタッカーにプレッシャーをかける機会が多くなったと考えられる。さらに、アタッカーが被ブロックされまいとしてブロックを避けたことにより、ミスが増え、影響を与えたと推察される。2nd テンポ攻撃は、常にブロッカーが複数人いる状況において得点を獲得でき、かつミスをしないスキルを身につける必要がある。さらに、状況判断も必要と考えられる。

1st テンポ攻撃の被ブロック率と2nd テンポ攻撃の効果率 ($r = -.702$) および決定率 ($r = -.754$) の関係について高い相関関係がみられた。本研究において抽出された1st テンポ攻撃打数2,225本、2nd テンポ攻撃打数4,205本を比較しても打数の少ない1st テンポ攻撃がブロックされたことにより、相手ブロッカーが1st テンポ攻撃へのマークの意識を下げ、2nd テンポ攻撃へのマークの意識を高めたと推察される。セッターの心理としては、1st テンポ攻撃の被ブロック率が上がると1st テンポ攻撃を使用しづらい状況ではあるが、1st テンポ攻撃は2nd テンポ攻撃と比較しても失敗が少なく、成功が多いという結果であった。このことから、1st テンポ攻撃を使用して効果率を高めることは、得点の獲得率をより高め、チームをセット獲得に近づけることを可能とすると推察される。

1st テンポ攻撃の決定要因分については、攻撃参加人数、相手ミドルブロッカーの反応状況、相手ブロック参加人数に有意差が認められた。レセプション評価、前衛攻撃参加人数、相手ブロックシフトについては有意差が認められなかった。

攻撃参加人数については、3人のブロッカーに対して、後衛のプレーヤーを含めた4人で攻撃を行い、数的優位な状況を作り出すことが重要となる。相手ミドルブロッカーの反応状況については、コミットブロック

に対して失敗数が増えている。同じトスでもボールの打つポイントを変え、また、打つタイミングをずらすことでブロックをかわし、失敗しないためのスキルを身に付けることで、失敗が少なくより有効な攻撃にすることが可能である。ブロック参加人数が少ない状況をつくる要素については、詳細な分析が必要であるが、セッターがブロック参加人数の少ない状況を見極めセットすることが1st テンポ攻撃の成功と関係している。

レセプション評価については、渡辺・佐藤 (2016) のレセプションの精度とアタック成績は結びついていないとの報告と一致する結果であった。よってAパスより精度が劣るBパスであっても1st テンポ攻撃が機能していれば、勝利に近づくことを可能とすると考えられた。前衛のアタッカーが2人であったとしても、後衛のプレーヤーがバックアタックを行うことによって、4人攻撃を実行することが可能である。そのため、前衛攻撃参加人数の違いは1st テンポ攻撃結果には関係がない。相手ブロックシフトについては、リードブロックを効果的に発揮するためのブロッカー個人のスキルや身長差の要素、組織的なブロックの実行の可否が含まれており、本研究では有意差がみうけられなかった。

【結論】

レセプション・アタックの効果率を上げることがセット獲得への近道である。特に1st テンポ攻撃については被ブロック率を下げ、2nd テンポ攻撃についてはミス率を下げるのが重要である。Bパスであっても1st テンポ攻撃が使用可能な状況である場合は1st テンポ攻撃を使用し、さらに常に4人での攻撃を仕掛けることによって相手のブロックに対して数的優位な状況を作ることができる。前衛の攻撃人数が少ない場合も後衛のアタッカーが攻撃へ参加することで、数的優位な状況を作ることができたため、アタッカーは常に攻撃への参加を意識しなくてはならない。

1st テンポ攻撃に対して、相手ミドルブロッカーがコミットブロックの場合には、失点につながる可能性が高いため、セッターは相手ミドルブロッカーの反応状況を把握してセットすることが重要である。1st テンポ攻撃を行うアタッカーにおいても、相手ミドルブロッカーがコミットブロックの場合には、失点にならないためのスキルを身につけることが重要である。